

遊びを通して子どもの育ちを考える(5)

シュレッダーから生まれたラーメン屋さん

阿部 康子

新年早々には雪が舞い、一面の銀世界となって子どもたちを喜ばせたものの、その後はすっかり暖かい冬となり、毎年必ず少しではあるが出現して子どもたちを驚かせ、喜ばせる霜も、霜柱も、氷が張る、水が凍るということも全くなく日がすぎている。それでも、子どもたちは温かな日差しの下で風を揚げたり、バドミントンや鬼ごっこに興じ、部屋では双六作り、コマ作り、メンコ作りを中心に、個人の力を競い合う遊びが生まれ、続い

ていた。二月に入り、何か子どもの遊びに刺激となり、変化が生まれるきっかけとなるような素材はないものかと思いつく。たまたま我が家で使っていた家庭用シュレッダー（スーパーなどで売っている簡単なもの）が目に入った。ままごとコーナーに置いてみよう、子どもならどう使っていくのか見てみよう、と思い立ち、翌日ままごとコーナーに置いた。

二月四日(月) 登園した、さとこ、ななこは、ままごととコーナーに置かれたシュレッダーを素早く見つけて、

「せんせい、これなあに？」とシュレッダーを持って見せに来た。「これね、面白いのよ。やってみようか」と

広告紙を入れてハンドルを回す。紙がどうなるのかとじいつとシュレッダーの中を覗き込んでいた二人は「わあ、おうどんだ！」と大笑い。しばらく見て「家にあるよ」とさとこ。「えつ、さとこちゃん家にあるの、誰が使うの」「お母さんが手紙なんか使う時にやってるよ」

「へえー、さとこちゃんもやったことある?」「私はないけどね」「じゃあ、やってみる?」と二人にやりかたを説明してシュレッダーを預けた。二人が面白そうに始めると、登園した人達も次々と取り巻き、シュレッダーに紙を入れてはハンドルを回し、どんどん切っていく様子を眺め、そして「私に貸して」「僕にやらせて」と子どもたちの間を忙しく回った。シュレッダーにかけられた広告紙の山がままごととコーナーの鍋やボールに山盛りになり、それでも入りきらずままごととコーナーに散ら

ばっていった。誰かが「ラーメンだ」と言ったが、それ以上には進展しなかった。

ラーメン屋さん一回目

二月五日(火) こうき、たつま、ゆうすけが登園一番の遊びに、ままごととコーナーで広告紙をシュレッダーにかけ、どんどんラーメンを作ろう、と始めた。しばらくすると、こうきがシュレッダーを独り占めする。と、たつま、ゆうすけが怒り、ラーメン作りをやめ、園庭に出て行ってしまった。こうきは少しの間ラーメン作りをやっていたが「せんせい、たつまたちどこ行った?」と聞きに来て、「お庭へ行ったよ」と答えると、「俺も行ってくる」とラーメン作りをやめ、たつまとゆうすけを追って園庭へ行ってしまった。

たかゆき、りょうへいがままごととコーナーに入り、所狭しと細長くカットされた紙の山に手を入れたりほぐしたりしていたが、たかゆきが「ラーメン屋をやるで、来て」と呼びに来た。私がお客に行き、ラーメンを食べる

が、他に来てくれる人がいないので、二人はラーメンと言っていた紙の山をビニール袋に詰め、部屋の真ん中でボールのように投げ合つて遊び始める。

シュレッダーが空いているのをみさと、あやかが見て、ままごとコーナーに入り、広告紙を切り出す。そこへ、ことむ、わたるが入り、再びラーメン屋さんが始まった。わたるは積み木で台を幾つか組み「ラーメンですよ、来てください」と繰り返しまわりの子どもたちへ声を掛ける。「せんせいも来て、大盛りラーメンです」とご馳走してくれる。るりが「私も食べたい」とお客として加わった。「ラーメン食べにいつてらっしゃい。美味しかったよ」とさとこやななこに声を掛けるが、「今日はいいい」と参加せず、ちよつと寂しいラーメン屋さん開店で終わった。

その後、数日間は、生活発表会の相談をしたり、メンコやコマの大会が始まったりと、それぞれの遊びが中心となつて、ラーメン屋さんはお休み状態となつた。

ラーメン屋さん二回目

二月十二日（火） 登園活動を終えたみさと、あやかが、二人で作つた「お買い物双六」を棚から出し、さとこ、さくみを誘つて始めた。みかこ、ことむが「ウサギのご馳走！」と、それぞれパンの耳、野菜屑を持つて登園したのをきっかけに、あや、れみ、あやみ、あすかも誘い、六人で飼育小屋のお掃除に出る。園庭ではたつま、こうき、ゆうき、たかゆき、たつや、りょうへい、ゆうすけが、総合遊具（滑り台、雲梯、登り棒などが組み合わされている）を拠点にゾンビごっこに興じている。飼育の世話を終えて部屋へ戻ると、ままごとコーナーでみさと、あやか、さとこ、さくみが何やら忙しげに動いている。「双六は終わったの？」と近付いて声を掛けると、「うん、ラーメン屋さんをするの」と嬉しうに話し、さとこ、みさとがラーメンを作る人、あやかとさくみがお店を作る人と教えてくれた。ラーメンを作るとさとことみさとは、広告紙を切つてはシュレッダー

にかけ、お鍋に入れていく。見る間にお鍋はラーメンの山となる。ザルにも大皿にも、ラーメンはどんどん山を作っていく。時々二人は、「これ位でいいか」と顔を見合わせてはけけら笑い、またシユレツダーを回している。

一方、お店作りのあやか、さくみは、ままごとコーナーを広げようと、少し離れた場所に屏風を二枚繋げて立てて店にする。屏風の両面の床に積み木を並べ、階段を作る。そこへれみ、あすか、ななこ、あやみが「私もやる、入っていい?」「いいよ」で、ままごとコーナーを中心に賑やかになった。ラーメンを椀に盛る人、葱がいる、とれみが材料探して忙しい。ハムはどうするかあすかとななこがもめたが、今日は無しとなる。

そこへ、たかゆきとゆうすけがお客として来店する。二人は「ラーメンくれ」とコーナーへ向かって声を掛けるが、コーナーでは誰もが自分の思いに夢中でラーメンを作っているの、注文を取りに来ない。ゆうすけは「注文聞いてくれん」と怒って出て行こうとする。たかゆきが「俺が言ってくるわ」と、ラーメン作りのコーナーへ行き、ラーメンの盛られた椀を両手に「葱も入っとる」とゆうすけのところを持って来て満足そうに食べる。そこへたつま、こうき、ゆうき、



◀年中さんも来てくれた

りようへいが「何やつとる?」「ラーメン食つとる」「俺たちもラーメンくれ」と仲間入り、けれどもうお店はいっぱい!するとたかゆき、ゆうすけが「俺たちおわたたで」と席を譲る。そして「銀行やろう」と二人が広告紙でお金を作り始めた。これをきっかけにお金作りに仲間入りする人、食べにいく人、作る人が、今度は俺、私と役割を替わりながらメチャクチャ賑わってラーメン屋は終わった。

ラーメン屋さん三回目

二月十四日(木) 登園の早いりようたとりようへいが「サッポロラーメン」をやるうと言い出し、みさととれみが「私もやる」と仲間入りした。りようた、りようへい、みさと、れみがままごとコーナーを屏風で囲い、積み木を並べ、お店作りを始める。あやか、たつま、ゆうすけも仲間入りして店員になる。女の子たちは麺になる元の紙を切る(シユレツダーの口に合せて切つて入れるためである)。たつま、ゆうすけがシユレツダーにか

けてラーメンにしていく。

てつや、たつやがお金を作り、お客としてラーメンを食べに来る。てつやが「塩ラーメン一丁」と注文する。「俺は醤油ラーメンにして」とたつやも注文する。まま

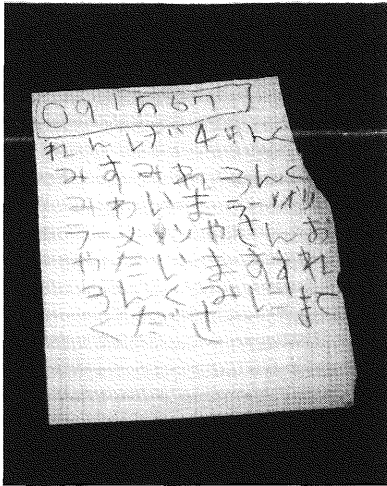
ごとコーナーの中は大忙しとなり、「僕作る人になる」と、りようたの大活躍となる。登園した人たちが次々とお客にくるのでお店は満員!

お店の横でりようへいとゆうすけがラーメンのメニュー、値段表を作り始めた。りようへいが「僕がやる」と何度も言うがゆうすけが譲らず、返事をせず書き続けるが、上手いかず、りようへいに場を譲り、書くのを替わる。りようへいは得意気に書いていく。

たかゆきがりようへいに寄り添って書き上がっていくのを眺めながら、携帯電話を手に「はいはい、塩ラーメン二つですね、すぐお届けします」「はいはい、チャーハン二つですか、少し待って下さい」と電話の注文を受けている。たかゆきは横にいたゆうたに「注文とるの替わって」と携帯電話を渡し「ラーメンを茹でなきゃ」と

コーナーに入り、ラーメンを鍋に入れ、茹で始める。りょうへいのメニューは出来たのかな、と見ると、たつや、ゆうすけも床に座って何か書いている。それはれんげ組（年少組）、たんぼぼ組（年中組）さんへの招待状であった。

店ではゆうたがお客の注文に応じて「チャーハン一丁」とコーナーに声を掛けると、「はい、チャーハン一丁」とチャーハンが出る。れんげ組さんが先生と一緒に「ラーメン屋さんはこちらですか」と大勢訪れてくれ



▲年少児に書いた手紙

た。続いて年中さんも来てくれて、保育室はお客さんとラーメン屋さんの人とても大変な賑わいとなった。ラーメン屋の子どもたちは嬉しくて大変である。たつやは、「飲み物はウーロン茶、オレンジジュース、コーヒー、カルピス、何でもありです」と満面の笑顔でサービスに努める。りょうへいから「なんでもありじゃないよ」と苦情が出るが「いいの、いいの」と意に介しない。そのうち、れみが「薬味がいる」と言い出した。シュレットダーにかけた紙を半分に切った状態で、紙を横にしてもう一度シュレットダーに入れると、紙は細くなる。これを葱のみじん切りとしてラーメンにかけてあげることにした。小さいお客さんは、年長組のもてなしにびびくりしながら大満足して、次々と交替して賑わいは続き、十一時に閉店した。

お弁当を食べている時、年中さんの先生が子どもたちを連れて「ラーメン屋さんは今日で終わりですか?」と訪れた。私が「どうしたの?」と聞くと、「ゆうすけ君から招待状を受け取ったのが十一時頃で、皆で駆け付け

ただけど終わっていて、皆がっかりしているんです」と言う。そこで皆に「たんぼぼ1組さんが今日のラーメン屋さんに来れなかったんだって。とつても残念がつているんだけどどうしよう」と相談する。話を聞いていたたつま、たかゆきたちが「明日もやるよ」、たつやが「明日早く来ればいいよ」と言ってくれて、年中の先生も子どもたちも「じゃ、明日来るからね、ありがとう」と帰っていった。

ラーメン屋さん四回目

二月十五日(金) 年中児のまさととは本当に楽しみにしていたようで、八時三十分に朝一番で登園し、すみれ3組のお部屋へ「まだやつとらん?」と聞きに来た。「お兄ちゃん、お姉ちゃんがまだ来ていないの、もう少し待っててね」と言うと、「ぼく、すみれ3組の地図を描いてくるわ」と勢いよく自分の部屋へ帰っていった。

しばらくしてりょうた、たつや、ゆうすけ、たつまが登園した。まさどが早くから登園し、ラーメン屋さんの

開店を待っていてくれることを伝えると「どつばやい」と驚きながら、たつやの「よっしゃ!」の声でラーメン屋の準備が始まった。

お店作りは、たつやが「ここんとこ広い方がいい」と言うのと「そうだね」とりょうたも了解、ラーメンを作っているコーナーと、お客さんの食べるテーブルとの間を通れるように積み木を組んでいく。

登園して来たななこ、あやか、りょうへいがシュレツダーを回し、「俺たちラーメン作るわ」とシュレツダーで麺や御飯を作る(御飯はお葱のみじん切りと同じ要領で作る)人となる。るり、さとこ、さくみがお金の担当、レジを置く場所作りで話し合っている。てつや、ゆうた、ゆうすけ、たつまが「注文とる人ね」とお客さん担当となった。皆に遅れて登園したみさととは、忙しそうな部屋の空気に押されてか、何をしたらよいか分からないう様子で、しばらく立つてままとコーナーを眺めていた。私から声をかけようと思っていると、ななこがみさとに気がつき「こっち手伝って」と声をかけ、手招きを

◀小さいお客さんは、年長児のもてなしにびつくりしながら大満足



してみさとを呼び入れた。

お金担当の人達が、おもちゃとラーメンのセット券を出そうと言い出し、まずは今

まで作って棚に置いていたドングリゴマ、ビー玉迷路、手裏剣、双六、ブーメランなどを持ち出し、レジの場所で売り出すことになった。

九時三十分開店となり、笑顔で待ちに待っていた年中組のまさと君が、地図を手に持って一番に入り、レジで見せる。「上手」とさとし、さくみに褒められ、笑顔でセット券を受け取り、積み木のカウンターに嬉しそうに腰掛けた。たつやが「何がいい？」とメニューを丁寧に説明してあげている。まさとくんは「醤油ラーメン！」と声を張り上げ、ワクワクしながらラーメンを待つ姿があった。今日も大勢の小さいお客さんを迎えて保育室は賑わい、熱気に溢れて、四日も続いたラーメン屋さんには終わった。

保育者が再び子どもから貰ったもの

二月四日（月）、ままごとコーナーにシュレッダーを置いたことが一つのきっかけとなり、ラーメン屋さんの始まりとなった。シュレッダーに紙を入れハンドルを回すと、紙が綺麗に裁断されて出てくる様子を見て、子どもが「おうどんみたい」と言ったように、ラーメンをイメージし、ラーメン屋さんを思いついたのは当たり前前のことであつたと思う。

しかし、たかゆき、りようへいが思いついて開店した二月五日の第一回目のラーメン屋さんでは、お客が保育者一人ということで、ラーメンはビニール袋に詰められてボールとなって遊ばれている。

その後は、今月末にある生活発表会の演じ物や、それに関連する話題、内容作りもあったが、なによりもシュレッダーで紙を切る面白さに子どもたちの関心が集まり、どの子どももひたすら広告紙を裁断した。そしてクラス全ての子どもがシュレッダーを思うままに使える（いろいろな切り方を発見した）ようになった。そして子どもたちの中に一つの満足感とゆとりが生まれ、二月十二日（火）第二回目のラーメン屋さんが出現したように思う。ここでもクラスの皆がラーメン屋さんになったり、お客さんになったりと、一見混乱したような雑然とした状況の中でラーメン屋であったが、子どもたちの中に「面白かった！」があり、十四日（木）第三回ラーメン屋さんへと進んだように思う。この日のラーメン屋さんはお店を作る、メニューを作る、招待状を作るといふよ

うに、開店に必要なものが考え出されていった。更に、十五日（金）の第四回ラーメン屋さんでは、麵を作る人、お金の係の人、接待係の人と言うように役割がはっきりとなり、更にお客さんがゆつくりできるような席作り、新しくおもちゃとラーメンのセットの券が出るなどの工夫が生まれるなど、ラーメンさんはより内容豊かとなって子どもたちを満たしていった。

二月四日～二月十五日の経過の中で、ラーメン屋さんごっこという遊びが、子どもたち自身の中で少しずつ少しずつ膨らみ熟成していったように思われる。

私は、担任となった四月から、卒園まで残された日は一か月という今までの、すみれ3組二十六人の子どもたち一人一人と過ごしてきた生活を振り返りながら、育てていったものをもう一度確かめるよい機会をもらった、四回のラーメン屋さんであった。

——終——

（愛知双葉幼稚園）